

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



東日本大震災3周年 犠牲者追悼式

あの震災から、3月11日で3周年を迎えたこの日、名古屋では久屋大通公園・久屋広場で、犠牲者追悼式が行われました。この3年間、行政や様々な団体・企業、そして多くの一般市民が支援活動を行ってきました。そして愛知県内にも、多くの被災者が避難生活をされています。

災害復興のひとつの節目といわれる3年…。いまだに状況は厳しく、まだまだ支援が必要とされています。そんな中、名古屋において活動を続けるさまざまな団体が、犠牲者を追悼するために集まりました。呼びかけ人は、市内で東北の物産店を営む「みちのく屋」さんの代表で、仙台出身の若林さんです。そのほか、私達「救援・中部」を含む13の団体・企業が実行委員会を構成し、37の団体・企業が賛同しました。

「追悼」と一言に言っても、その想いは色々で、言葉というのは時に思いがけず誰かを傷つけてしまうことがあります。3年という月日も、人それぞれで受け止め方が違います。イベント的になっていないか、何をするのが一番追悼の意を表せるのか、丁寧に話し合いながら作り上げました。来年以降も、追悼のために集う予定です。これを機会に、他の団体との横のつながりを作り、今後の活動に活かしていきたいと思えます。

(兼松)

この日、時を同じくして、名古屋 YWCA で、「未来につなぐ・東海ネット」と「救援・中部」は、木田せつ子講演会を企画し、講演前に「木田さんと原発、そして日本」の上映会を行っていました。その上映終了間際に、YWCA から追悼集会に駆けつけました。集会は始まっており、主催の「みちのく屋」の若林さんが主旨説明のスピーチをされていました。会場の久屋広場には、たくさんの人々が集まり、やがて献花が始まりました。献花の途中、地震発生の14時46分、東北へ向かって黙祷を捧げました。名古屋・栄の喧騒の中に、追悼と祈りのしじま…。最後に「東海岩手県人会」石井弘子さんによって、追悼式宣言が読み上げられました。「…犠牲になったあなたたちを決して忘れません。」…やがて夜の帳も落ち、2万本ものキャンドルが、静謐な祈りを湛え、灯っていました。(山盛)



〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター B1

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京 UFJ 銀行 名古屋営業部 (店番号 150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>



チェルノブイリ救援



☆とどけ鳥事務所の現状

「放射能測定センター・南相馬（とどけ鳥）」は、2012年3月末に2台目測定器（EMF211型）を導入以来、満2年が経過しました。2ヶ月の研修期間後「とどけ鳥（愛称）」として開所、約6,000検体の測定を実施し、4月に3年目を迎えます。市民が持込む検体（食品・水・土壌）を測定する市民測定所として、定着しつつあると実感しています。

しかし、12月から3月下旬にわたり、昨年度と比較し、急速に検体持込み数が減少しています。この傾向は、とどけ鳥事務所のみならず、9ヶ所の市測定所も同じです。ようやく春めき、山菜も芽吹き始めています。早めに測定したフキノトウ（小高区産）は、Cs合計320Bq/kgもあり、決して



食べられる状況ではありません。昔から多くの方が楽しみにしていた春の山菜は、今年もいやまだまだ先まで、残念ながら食することはできません。「もう安全だ！」と思いたくなる気持ち、その油断が内部被曝を増大させる最大の原因であると肝に銘じて、「測定してから食する」習慣付けを訴え続けていきます。

☆汎用コンバイン入手へあと1歩

12月に発足した「南相馬農地再生協議会」は、当面は油脂植物を栽培→搾油し、食油の生産を行いながら、葉・茎・搾りかす等を利用したバイオガス（循環型再生エネルギー）生産に向けて、1歩を踏み出しています。昨秋は、菜種を17圃場（約12ha）に播種しています。6月下旬の収穫は協議会で行い、搾油し食用油として販売、残りは来秋以降の圃場拡大の種利用として用途を考えています。圃場拡大には、新しく農家の方々に賛同を得なければなりません。協議会への参加を含め、既に呼びかけ始め数名の賛同加入を得ています。チェル救が行ってきた「コンバインキャンペーン」で、多くのご寄附をいただいています。また、「タケダ・いのちとくらし再生プログラム（第5回助成事業）」より、コンバイン費に充当できる助成金も決定しました。「南相馬農地再生協議会」が申請している「地球環境基金」助成金の可否は、4月上旬に決定されます。これらの状況を踏まえて、具体的に汎用コンバインを入手すべく、再生協議会で機種・価格・性能・新品・中古品等の選定作業に着手しました。収穫時迄には、汎用コンバインを購入して、運転技術の習得も完了し、収穫に間に合わせたいと考えています。引き続き、皆さまのご支援をお願いします。

☆震災関連死が増大、福島県突出

震災・原発事故後3年が経過し、狭い仮設の暮らし、慣れない土地で生活する孤立感、避難者の心身の健康を脅かしています。避難後の環境変化などで亡くなった「震災関連死」は増え続け、地震・津波等の犠牲になった「直接死」を上回りました。3/10現在、福島県のまとめによりますと、避難等の影響などで震災関連死と認定された死者数は1,671名で、地震・津波などによる直接死者数1,603名を上回り、1月末現在の岩手県434名、宮城県879名の関連死と比べても、福島県が突出して多いのです。福島県内の関連死者数は、南相馬市447名で最多、浪江町317名、富岡町232名、いわき市125名、大熊町99名、双葉町99名、楡葉町95名、川内村68名、広野町38名、葛尾村24名、飯館村42名となっており、南相馬市・飯館村・双葉郡8市町村で1,461名（全体の87%）と、原発事故による避難者数の多い市町村で、関連死が生じている現象が鮮明です。復興庁調査では、震災事故から1年経過後の死亡割合は、岩手・宮城両県が3%以下、福島県は16%、原発事故による先も見えない避難生活が、高齢者の体調をより悪化させている現状が見えてきています。（福島民友参照）

☆第7期放射線量率マップ作成

前号で発表しました、南相馬市第7期、浪江町第3期放射線量率マップ作成のボランティア募集は、3月上旬に満員となり、締め切りさせていただきました。

ご応募ありがとうございました。5月末頃には新しいマップを発表させていただきます。

=イベント予告&賛同者大募集！=

「日本をとりもどす マツリゴト day」

(＊いにしへの時代、政治は「まつりごと」と言われた。
皆が集まり、世の中を正しく治めるために知恵を出し合った。)

～決めるのは私たち！—原発・平和・くらし— すべてのいのちと未来のために～

★日時・場所：2014年6月1日(日) 11:00～16:30 @白川公園にて

★主催：「マツリゴトday」実行委員会

★内容：今の日本の政治について疑問を投げかけ、社会の一員として市民ひとりひとりが、今後の日本のあり方について考え、政治参加することを目的とした野外イベント。単なるイベントで終わらせずに、参加者の今後の行動に訴えかける内容にしていきたいと思っています。

◎メインステージ：ゲストを迎えトークや歌などのパフォーマンス

◎出店ブース：野菜や果物などを販売するマルシェ（市場）、物品販売や展示など

◎プレスステージ企画：プロ・アマ問わず出演者を募集

いま、私たちの未来はどこにありますか？／福島原発事故から3年—あの日から何が変わったでしょうか？／日本は今、原発を「重要なベースロード電源」と位置づけ、安全性が確認された原発は「再稼働する」として安全審査が進められています。さらには海外への原発輸出さえも推進しています。

でも、忘れないでください。／まだ福島原発事故は収束していないことを…。／本当の事故原因の究明すらできていないことを…。／そして、今もなお13万5千人の人が、ふるさとを奪われ避難生活に苦しんでいることを…。／培ってきた大地を私たちが汚してしまったことを…。

それだけじゃない、日本は戦争に向かおうとしている…2013年12月、秘密保護法が強行採決されました。／わたしたちの権利や自由が、国家権力から不当に奪われないように…。／二度と戦争という過ちを繰り返さないように、私たちを守るためにある憲法…。／それさえもねじ曲げようとしています。

私たちのくらしは安全ですか？平和ですか？／政治って難しいけど、それは私たちの生きるこの日本をこの町を、私たち自身で作り上げること…。／次の世代のために平和な未来を描くこと…。／それを一人じゃなく、多くの人が集う「まつり」の中で見出していくこと…。／それこそが「マツリゴト」！

私たちの未来は、私たちの手の中にあります。／今こそ、人まかせにせず、ともに考えともに語り合い、私たちの日本を、「マツリゴト」を、私たちの手に取り戻しましょう！

★メインステージゲスト

◎坊さんバンド G・ぷんだりーか

…仏教のあたたかく優しい教えを伝えたい、宗派の壁を越えていのちの尊さ・有り難さを伝えたい、そんな気持ちで結成した住職たちの集まり。基本的なテーマは「いのちの輝き」。「法話」と「音楽」のコラボをお楽しみに☆

◎三宅洋平(Yohei Miyake)

…音楽家(1978年生まれ)。ライブやネットを通じて社会に対するメッセージを発し、国内の原発問題にも事故以前からアクティブな動きをみせていた。保守的な日本社会の誤解と先入観をおそれず「政治に参加し、政治をアート」する姿勢を明確に打ち出す。2013年7月参院選に立候補し17万票を獲得。唄う選挙演説、選挙フェスなど注目を集めた。



<三宅洋平さん>

◎そのほか避難者の声も。

★参加方法：

- ①実行委員としてこのイベントを作り上げる！
- ②賛同人または賛同団体として応援する。
- ③当日イベントに参加する。ブース出店、野外ステージ企画あり。
出店者・出演者募集！

★このイベントは、賛同費を集めて開催します。ご協力よろしくお願ひします。

(団体3千円・個人1千円/1口)(現在の問合せ先：チェル救)



<2月訪問団 報告 (2月7日~16日)> (神谷 俊尚)

2月の訪問団は、南相馬からの参加者を含め7名となり、事務局を中心に年末から準備態勢に入りました。しかし、皆さんご承知のとおり、昨秋以来くすぶっていたウクライナ政局が、1月中旬以降急速に悪化し、キエフ中心街のみならず、ジトーミル州庁舎にもデモ隊が押し寄せる事態が発生しました。1/20 過ぎには、ホステージ基金から「州庁舎も占拠され、事務所にも入れない。訪問は延期してください。」とのメールも入り、状況判断は混乱を極めました。しかしその後、政治的逮捕者の釈放等の話し合いで、急速に事態の改善が見られ、2/3に訪問実施を最終決定しました(1名キャンセル、6名で訪問)。2/7 成田発、2/8 ドイツのマウエンハイム(自然エネルギー村)視察、2/9 ドイツからウクライナへ、2/10 チェルノブイリ原発見学、そして、ホステージ基金との打合せは、2/11・12の2回、早朝から行われました。

①医薬品支援3団体への医薬品費(ウクライナの政情不安による未送金に関して)

ホ基金は、書類を社会政策省に提出済み。以前の資料も請求されそれも提出済み。同省で審査後、国税庁でチェックし外務省から認可書は下りた。毎日メールを確認しているがまだ連絡がない。(帰国後、3月中旬に認可が下り、送金済み。支援団体はこれで医薬品購入ができます。)

②ナロジチ行政の「菜の花プロジェクト」に対する、日本外務省「草の根支援」に関して

本来なら、昨年11月末に可否決定のはずだが、昨秋以降のウクライナ国内の政治的混乱と1月からの中央省庁に対する封鎖デモで、日本大使館もその封鎖圏内にあり、市内のホテルに大使館が避難し、臨時連絡所体制中。「草の根支援」に関して、ナロジチ行政に対しても返答がない状態との事。農大側も、未決定につき動きが取れず静観状態です。

③新年度の「ミルクキャンペーン」「ナロジチ病院」「被災者3団体支援」に関して

ホステージ基金・チェル救とも「昨年並み」で合意。ミルクキャンペーンは、金額的に変更はないが支援先変更の申し入れがあった。オブルチ地区病院等地域の病院へできるだけ多く配りたい(3月チェル救会議で了承)。

④その他、業務委託費やクリスマスカードキャンペーン等々の、事務打ち合せを行いました。

<子ども達の未来を守ることは、私たち大人の意思決定の大きな責任> (坂下町 千葉 親子)

最初の訪問地は、ドイツのバイオエネルギーの村マウエンハイムです。9年前から、発電と家庭用温水供給に取り組んでいます。国の方針が脱原発にある事、地域発電事業の取り組みにより地域経済やコミュニティが良い方向である事など、再生可能エネルギーの可能性を視察。次に、チェルノブイリ救済・中部との共同研究「菜の花プロジェクト」に取り組んでいる農大訪問です。耕作を続けながら次の世代に大地を引き継ぐために、買ってもらえない農産物の生産から加工品に変更する取り組みは、福島放射能に汚染された大地の農業再生に向け、感慨深いものがありました。原発視察では、30キロ圏内に住むサマショーロ(移住先から戻ってきた人)のお宅を訪問しました。移住先で、ストレスから体調を壊し、亡くなる人が多かった事を聞き、ここにも日本でいま起きている災害関連死があったことを知りました。小・中学校や保育園訪問では、感動的な子ども達の出迎えがありました。300人以上いた園児が、今は100人。人口は事故前の3分の1だそうです。私は福島現状をお伝えし、当時の事をお聞きしました。お話ししながら涙ぐむ先生の姿に、移住できる人、できない人、家族の分断がここにもあったことなど、原発の不条理で理不尽さは、それがすべての国、すべての原発に通ずる事と強く思いました。

チェルノブイリ30キロ圏内には、かつて94の村と2つの市があったという。原発労働者の街ブリピャチ、そして、事故現場で建設中の放射能遮蔽石棺工事を視察。28年経ち、今だに人を近づ

けさせない、核の脅威を感じました。

消防局やチェルノブイリ博物館では、原発事故当時の消火活動の様子をお聞きし、事故の内容も放射能の知識も被曝についても、何の情報もない中で消火作業が続けられ、被曝を余儀なくされた原発事故現場は最悪です。日本の東電福島第一原発事故現場は、労働環境も雇用形態も健康管理も劣悪、もっと最悪です。原発の隠ぺい体質があることや、原発を稼働する限りあらゆる現場で被曝者を出してしまうということは、いずれの国も同じなのです。日本は、もっと国民の生きる権利と人権を守ること、何よりも再稼働は許さない、原発労働者の国レベルでの対処が必要です。子ども達の未来を守ることは、私たち大人の意思決定の大きな責任です。

団長の神谷さん、通訳の竹内さん、お世話になりました。政治情勢不安定なウクライナにもかかわらず、充実した実りある研修が楽しくできました。

<生きている我々が、復興という形で後世に繋いでいく>

(南相馬市 奥村 健郎)

平成 26 年 2 月 8 日から 16 日まで (他のメンバーは 2/7 から)、1986 年の事故から 28 年目のチェルノブイリを訪問しました。

原発周辺の廃墟と化した街は、福島原発事故における 10km 圏内の数年後の姿を想像させられ、目をそむけたくなる状況でした。現在も、新たな石棺建設のため、多くの作業員が従事する姿を目の当たりにし、30 年先の福島第一原発においても、決して容易な状況ではないことが危惧されます。しかし一方で、汚染状況が改善された地区においては、子ども達の元気な姿や若者たちの生き生きとした姿が見られ、勇気づけられてきました。

ジトーミル州の小学校とナロジチの幼稚園を訪問した際には、子ども達から大変な歓迎を受けました。何よりも感じたのは、「その子ども達の笑顔が、地域の大人たちの活力を生み、元気を与え、28 年の歳月を経たその地域の復活につながっている」…そんな思いをしてみました。その裏付けは、市民のしっかりとした「内部被ばく管理意識」が、28 年経った今もしっかりあるということです。

農業においても、地元の農業大学と農家の皆さんとの連携と長期にわたる復興計画が、しっかりと安全・安心を支えていると感じました。ムィコラ・ディードゥフ (国立ジトーミル農業生態学大学准教授) 氏の話で印象的だったのが、「学者も政府も言うことが違う。最後は農家自身が安全を確認し、農家の判断で生産者に安全・安心を与えることが重要です。そのためには、地元の大学や行政との連携による、生産管理体制が重要です。」的な話でした。言葉がわからないので、竹内さんの通訳を通してそんな感じで受け止めました。

日本に戻り、3 月 11 日、震災から 3 回目の追悼式が、南相馬市文化センターで行われました。亡くなられた方々の無念の思いとご家族の悲しみを、また深く感じながら、改めて、亡くなられた方々のご冥福を祈りました。私たち、生かされた者・生きている者が、こうして 3 年を経過し、これから何を考え、何をどうするか、それは「無念の思いで亡くなられた方々からの、命題でもある」と思います。その先は、子ども達であり家族であり、また、大地でありふる里であり、それは心であるかもしれません。それらのすべてを、「生きている我々が、復興という形で後世にしっかりと繋いでいく」…それがいま生きている私たちの、やるべき事だと思います。

特に、農地を守る農家にとっては、それぞれの判断の中で、やれる者がやれることから行う重要性を、今回のウクライナ訪問で強く感じました。自分は、その一人であるとの認識で、これからも取り組んでいきます。



<ジトーミル市 第 25 番学校にて>



バイオガス・放射能吸着装置 完成間近！ (原 富男)

福島県郡山市の「にんじん舎の会」での「バイオガス発生装置」＋「放射能吸着装置」の工事は、開始以来 82 日を経過しました。前号では、発酵槽底部までの工事内容を報告しました。その後、発酵槽は、壁・ドーム・点検口・内部のモルタル塗りまで進んできました。加圧槽も、基礎・

壁・屋根・点検口 2ヶ所…と工事が進み、加圧槽工事は終了しました。また、一番最後にとりかかった放射能吸着装置と小屋の工事ですが、本日ででき上がりました。これで、工事の中で要点となる部分は、発酵槽内部のモルタル塗りと配管関係を残し、ほぼ完成したことになります。

大雪で工事中断 夫婦 2人でダンプカー用の道、100m 雪かき！

工事期間中の 2月9日と2月15日には、大雪が降りました。この大雪で、「にんじん舎の会」の鶏小屋用ビニールハウスも潰れるという被害を受け、15日の雪では、宿舎から県道に出るまでの道が塞がれてしまい、車で出かけることさえできない状態になってしまいました。翌日の新聞では、「郡山市の積雪量 82 cm」と出ていましたが、雪が怖いと思ったのは初めての経験でした。宿舎は袋小路にあり、4軒ほどの家があるのですが、雪かきをする気配はありません。長野県の私の家の場合、雪の日は早朝から除雪車が出て除雪するのが普通なのですが、郡山では除雪の経験がないようです。雪かきをしなければ仕事にも買い物にも出られないので、女房と2人で宿舎から途中の交差点まで、100m 近くの距離を雪かきました。

「水の流れ込み」と「ぬかるみ」！

バイオガスの工事のほとんどは、コンクリートとモルタル仕事です。そのため、「型枠を作り、生コンを投入し、乾いたら型枠を外し、また次の型枠を作る」という作業が、工事終了まで続くことになります。作業を邪魔するかのよう、雪解けの水が、掘削現場の周辺で一番低い位置にある「発酵槽」の周りに流れ込むという事態が起きました。そのままにしておけば、周囲の土が崩落し、事態は收拾がつかなくなりますので、水中ポンプを借りて何度も「水を排出」することになりました。また「雪解け水」や「雨水」は、発酵槽の周りばかりでなく、現場周辺の道路・通路を傷め、「凍結」はまだしも、「ぬかるみ」となると始末に負えないのです。まず、ダンプカーが空転して動けなくなり、一日に何回も、ダンプカーの尻をバックホー（掘削用重機）で押さなければ、脱出できなくなります。また、生コン車が現場に入れなくなり、入れない距離だけ一輪車に生コンを小分けして運ぶなど、手間と労力が倍増してしまう事もありました。

毎日、泥の田んぼに入っているような状態なので、泥の重さで膝関節が痛くなり、衣服はまるで戦場を這い回ったかのように汚れ、夫婦でお互いにそのヒドイ身なりを見て、「頑張ってるね！」と励ましあうのでした。だから、宿舎に戻ると直ぐに服を脱ぎ、風呂場に持ち込んで、洗濯前に「泥落としの為に予備洗い」をすることが、日課となっています。

寒さ凍結！

寒さと凍結も、いろいろな部分で作業に支障をきたします。郡山の寒さは、長野県伊那市に比べれば随分暖かく、「冬場はこんなところで過ごしたいものだ」と思わせる程です。しかし、凍結しないわけではありませんので、思わぬところに落とし穴があります。その一つが、発酵槽と加圧槽の間にある、直径 20cm の塩ビ管と発酵槽の「繋ぎ目の接着」でした。

接着には、エポキシという接着剤を使うのですが、この接着剤は、氷点下ですと粘土程度の柔らかさにしかありません。通常は、パイプと発酵槽の貫通部のコンクリート壁の間に、流れ込むほど柔らかいのですが、固く隙間に入って行きづらいのです。パイプ表面が凍結していた為なのか、パイプに重さが加わった為なのか、この部分から外の水が浸入するという事態が起きました。もちろん、そのままにはしておかず、一度埋めた部分を掘り返して調べたところ、接着剤が切れ

ている部分が見つかり、温めながら薄いヘラを使って隙間に接着剤を慎重に突き入れ、乾燥させたのちに、その上をコンクリートで固めるといふ、二度手間仕事をせざるを得ませんでした。この為、この時期は精神的にも随分追いつめられました。

宿舎に戻れない！

我々夫婦が、宿舎として用意してもらっている場所は、昼間デイサービスセンターとして使われています。この場所を、夜だけ宿泊に使わせてもらっているのですが、困ることがあります。それは、デイサービスの利用者がいつもと違う様子を察知すると、「パニックしてしまう」ことがあるようで、「テレビが外に投げ出され」ていたり、「物を壊される」ことがあります。その為、朝出かける前には、我々の生活の痕跡を残さないようにしなければなりません。また、朝8時から夕方5時半までは戻ることができないので、雨が降って仕事ができない時は、大型ショッピングセンターをぶらついたたり、500円温泉に行ったり、図書館に行ったりと、工夫しなければならないのです。

我が家の愛猫「チビ太君」宿舎で大手柄！

我が家は、夫婦2人と猫一匹の所帯なので、出張に当たり猫だけを置いてくることはできません。そこで、今回は郡山に連れてきたのですが、この宿舎では、夜になるとハクビシンかネズミか動物の物音がします。ある日の出かけ前の朝、「チビ太」がネズミをつかまえました。それ自体大変喜ばしいのですが、喜んで「ネズミを放り上げては噛みつく」ということを繰り返し、居間の絨毯を血だらけにしてしまったのです。このままでは出かけることができないので、急遽「証拠隠滅担当」の僕が、洗剤とボロ布をもって出勤。素早く元通りに直しましたが、時間との勝負の朝なので焦りまくりました。何はともあれ、デイサービスの職員にチビ太は褒められ、その日以来、夜の「チビ太」はパトロールに熱中しています。



福島民友「除染の話」！

工事期間中だけでは言え、実際に福島県に住んでみると、長野県では気付かなかったことがいろいろあります。こちらに来て直ぐ、地元紙「福島民友」を取り始めました。まず、長野県の新聞に比べ、原発・放射能関係の記事の多さに驚かされます。また、世間では終わったと思われる福島の事故被害や影響、除染などの記事の豊富さに驚きました。除染の話では、工事に当たった職員の話が載っており、「道路脇 20m 幅で土を剥ぎ、新しい土に入れ替えても、1 週間もすれば元の数値に戻る」「環境省は、一度除染すれば再び線量が戻ってしまっても、除染済み扱いとする」というような話が、連日新聞に載ります。このような話は、全国紙でも取り上げ、福島の現実を伝えて欲しいと切に願います。

吸着槽とゼオライトの話！

いよいよ工事も終盤を迎え、「放射能吸着装置」に入れるゼオライトの入手先を探してみましたが、市販されているゼオライトは種類が多く、どれを買ったらいいのか判断に迷います。そこで河田さんに調べてもらおうと、「クリノプチロライト」という種類の吸着率が抜群に高いとの事。ゼオライトは、物により 70 倍もの吸着率に差があるので、良い物を選びたいと思います。



<原さん(右)と
「にんじん舎」の仲間たち>

完成直前のスパート！

残すところ、工期もわずかとなりました。この間、「にんじん舎の会」の職員・利用者さんには、生コン投入などの場面で「困ったとき」、度々応援してもらい感謝しています。また、職員のお世話により、バックホーを3ヶ月間も格安で借りることができ、これも感謝々々です。振り返れば、夫婦2人での工事自体、パワーからして無理があったともいえますが、工法や段取りなど、今後に活かせる経験もすることができました。残す期間、丁寧な工事に努めたいと思います。

菜の花がつなく福島未来と私たち

NPO 法人 菜の花プロジェクトネットワーク 代表 藤井 絢子



3・11 から三年が経ったのですね。40 年あまり琵琶湖と共に生きて来て、今、琵琶湖発で福島とつながっている事の不思議を感じます。神奈川から滋賀に居を移して 43 年。何と多くのコトをおこし、ヒトに出会い、ツナガリをつくって来たことか…と、我ながら驚いてもいます。

折しも『地域づくり総務大臣表彰大賞』を受賞したのですが、その大賞の理由に

- ・琵琶湖の水質改善で活躍したことにとどまらず、「菜の花プロジェクト」など、様々な活動に発展させた行動力を高く評価
- ・日本の環境行政に大いに影響を与えた人物
- ・長年にわたり、水環境再生の運動に関わるとともに、次々とユニークで先進的な運動を展開し、とりわけ「菜の花プロジェクト」を全国的に広めた点が評価できる

などがあげられていますが、身に余る」と同時に、「まだやる事があるぞ」と、背中を押された感があります。

さて、何と言っても 1960 年代末、学生時代に出会った石牟礼道子著「苦海浄土」以来、「水俣」は、その後の私の生き方の原点となります。水俣とそこに暮らす人々と共に生きた、尊敬する故・原田正純医師は、「水俣は、社会を写す鏡」と語っていました。1977 年、母なる琵琶湖に赤潮が発生した時、「琵琶湖は、私たちの暮らしの写し鏡」を実感しました。産業・農業・生活等様々な場から流し続けるチッソ・リンが、琵琶湖を汚し続けていたのです。家庭では、リンの含まれた合成洗剤を使っていた時代でした。洗濯という日々の営みが、琵琶湖に病をもたらしただけです。

私たち生活者は、水が汚れたことで被害者になると同時に、水を汚している加害者にもなっていたのでした。この時から、「被害者にも、加害者にもならない」を行動の指針にします。残念ながら、琵琶湖の汚染・富栄養化の状況は、更に悪化の一途をたどり、1983 年にはアオコを見るに至ります。1992 年、リオデジャネイロの環境サミットでは、地球温暖化が大きな課題として浮上して来ます。早速、行動を起こします。化石燃料代替のバイオ燃料への挑戦です。原料は、リサイクルせっけんと同様、地域にある「油田」…廃食用油です。モデルは既に取り組んでいたドイツなどです。菜種油の BDF 化で、農業とエネルギー両方を見すえた『Agriculture as Energy Supplier (エネルギー供給源としての農業)』と書かれたドイツのリーフレットに驚嘆したのも、この頃でした。

1997 年の COP3 を契機に、更にステップアップします。菜の花の登場です。農業に目を向け、資源循環でエネルギー・農の地産地消、地域自立への道を拓いていきます。1960 年代、カナダから大量の菜種油を輸入する前、日本では 26 万ヘクタール以上の菜種栽培がありました。耕作放棄地が広がり、米の転作割合が増える中、菜種栽培を見直すべきだと考えたのです。1998 年、「菜の花プロジェクト」のスタートです。以来、全国 47 都道府県の総てで、大小様々なスタイルの「菜の花プロジェクト」が展開するまでになりました。

3・11 が「菜の花プロジェクト」に新たな展開を迫ることになります。南相馬では、震災前から取り組んでいた、いわき・須賀川に続き、南相馬の仲間が加わりました。地震・津波・原発の被害を受け、何もかも失う中、種まきをしましたが、「被災後はじめて、こんなに皆がつながり、本当に嬉しい！」…と。「子どもも年配者も、元気を取り戻す一つのきっかけになっているな」と感じています。

昨年末からは、東北電力に頼らない BDF 発電のイルミネーションも始めました。「福島から始めるべ。はじめはちっこくていい。」と語る、皆さんの笑顔が素敵でした。今回の連続セミナーの趣旨に、「東北学」「仙台学」提唱の赤坂憲雄さんの言葉が紹介されていました。「人として、身の丈に合った暮らしの知恵や技を復権し、近未来のあるべき風景を、東北の地から思い描きたい」…と。心に響きます。

私も、ゼロからではなく、マイナスからのスタートになっている被災地を歩きながら、菜の花を通し、更に一步、と静かに燃えているところです。

福島第一原発事故から3年が経った。政府の掛け声とは裏腹に、依然として進まない福島の復興。政府をあてにせず、自分たちで汚染地域での生活を再建しよう。放射能汚染下で、被曝を低減しながら如何に生きていくのか。汚染とどう向き合っていくべきか、全ての人々が問われているのだ。

原発事故の思いは昨日の続き

事故から3年が経過し、福島以外の地域では原発事故は過去になりつつある。福島でも、行政が主導して原発事故を過去に追いやろうとしている。何かの間違っている。原発事故の影響は、これからが本番だからだ。汚染地域住民にとっては、事故から3年経っても10年経っても、事故への思いは昨日の続きである。それがチェルノブイリの経験だ。チェルノブイリに学ばない日本は、また同じ過ちを繰り返すだろう。

忘れることは未来につながらない。放射能と真摯に向き合い、被曝を如何に減らすかを真剣に考えながら、未来を作らなければならない。避難者にとっても残った人々にとっても、思いは同じはずである。チェルノブイリでの活動と同じく、私たちは汚染地域に残らざるを得ない人々に寄り添って生きる。

内部被曝低減のために

チェルノブイリでは、被曝の約70%は内部被曝だった。見えない放射能を、私たちは日々体内に取り込んで暮らしている。汚染し難い野菜を作り、汚染を減らす栽培方法を工夫することは可能だ。ウクライナでは、放射能をよく吸収する菜種でゆっくり除染しながら、バイオエネルギーで地域の復興を目指した。

「ナタネの裏作は汚染が激減する」という発見は、汚染地域での新たな農業の可能性を開いた。この経験を福島でも活かし、新たな農業の可能性を目指したい。汚染地域は、過去と同じ稲作中心の農業だけでは成り立たないからだ。

南相馬を新たな農業の前線に

チェルノブイリの経験から、「ナタネ種子は強く汚染するが、ナタネ油は汚染しない」ことが分かっていた。2012年に南相馬で試験栽培したナタネの油もまた、ゲルマニウム半導体検出器の精密分析において、検出限界0.03Bq/KgでもND（検出せず）だった。

土壌の水分から吸い上げられたセシウムは、植物体の中でも水溶性で、搾油時に油とは分離するのである。放射能は全て油かすに残る。現在、植物油の国産化率は4%未満、ナタネ油に至っては0.04%である。市販の食用油は、カナダ産の遺伝子組換えキャノーラ油である。安全な植物油の国産化を目指すことも、福島復興に叶う目標だ。

南相馬農地再生協議会発足

2013年12月、南相馬の農家や市民団体による「南相馬農地再生協議会」が発足した。ナタネを、現在12.5ha栽培している。6月末には収穫し、搾油して全国の消費者に届けたい。勿論、農作業での被曝には十分気を付けなければならない。

2015年には、南相馬に搾油工場を作りたい。2016年には汚染した油粕やバイオマスでメタン発酵させるバイオガス工場を作り、冬季の温室の加温や、夏季には発電に利用する。

小さいながらも、原発に頼らない持続可能な農業と地域社会を目指す。厳しい困難を新たな視点で乗り越え、安全な地域を未来の世代に残したい。そんな思いで、これからも私たちは南相馬に通う。

(2014年3月 河田)



チェルノブイリ/フクシマ講座

「福島の郷土料理を作ろう」での楽しいひととき

(市原 佳代)

名古屋東生涯学習センターで2月16日、日本各地が大雪と暴風で大混乱となったその日、南相馬市小高区の旅館女将の小林友子さんと紺野佳奈子さんに遠路はるばるお越しいただき、福島の郷土料理を教えてください、貴重なお話をうかがいました。

メニューは「ほっきごはん・こづゆ・いかにんじん・

鮭の粕漬け」です。材料の調達、下ごしらえはすべてお二人がしてくださり、おまけに参加者は「小高だいこんかりんとう」(P12 参照)のお土産までいただきました。食材は、南相馬の「とどけ鳥」で放射能の測定をしてお墨付き。料理の「こづゆ」は、おつゆの少ないお吸い物という意味で、福島会津地方ではお祝いの席でいただく料理とのこと。そのとき使う塗りの器も紹介してくれました。鮭は、福島では豊富に採れる魚で、大量に採れた鮭を味噌や粕に漬け、日持ちさせるそうです。でも原発事故後は、福島の川の鮭は汚染し食べられなくなりました。

現在休業中の旅館再開を心待ちにされているお二人は、この3年間、放射能汚染という現実にとしっかりと立ち向かい、将来を見据えての発言に、私たちはこういう人たちの言葉に耳を傾ける機会をもっと作らなくてはいけないと思いました。この講座は、宗教法人真如苑東日本大震災助成を受け、今後も継続していきます。次回は夏ごろ開催予定です。ぜひぜひお楽しみに。

木田せつ子さんのお話

(橋本 京子)

3月11日(火)、久屋大通り公園で行われた東日本大震災の犠牲者追悼式と並行して、YWCA ビッグスペースで「木田せつ子さんのお話を聞く会」がありました。木田さんは、福島県富岡町に住んでいました。

夫婦共働きで、20年前に念願の家を建て、息子と娘の4人家族。ただ、息子さんは東電の下請け会社で働いていました。今は、夫婦だけで水戸市に避難しています。事故後の10カ月間は引き籠っていたそうですが、その間、広瀬隆さんや鎌田慧さん、小出裕章さんの本など、たくさん読んだそうです。そして、ある講演会をきっかけに、「あなたは、あなたの大切な夫、息子に原発で働けといえますか。私は言えません。原発作業員の母より」と書いたプラカードを掲げて、デモに参加するようになったそうです。新橋のサラリーマンに向かってマイクを握り、官邸前で「原発いらぬ福島の女たち」のメンバーとして訴え続けています。そして、昨年の参議院選挙に「緑の党」から立候補されました。原発の是非をめぐる息子さんと葛藤があり、判ってくれたと言う時もあったのですが、残念ながら雪解けには至っていません。

木田さんのお話に先だって、「木田さんと原発、そして日本」というドキュメンタリー映画が上映されました。わたしが震撼としたのは、木田さんの銀座での街頭演説の映像。休日の混雑する交差点、子連れの子供も、恋人同士も、初老の夫婦も、誰一人立ち止って耳を傾ける人はなく、チラシさえもほとんどの人が無視でした。木田さんは、「この国は私が思っていたような国じゃなかった」と言っています。補償金をもらった人と訳の分からない線引きでもらえなかった人、避難した人と避難できない人。原発事故は、「地域を分断し人間関係を壊している」と言われました。25年間、バスガイドをしていて喋るのは得意。ユーモアを交えて笑いをとりながらの、あっという間の2時間でした。ご本人はまだ話し足りないようでしたが…。





クリスマスカードキャンペーン ウクライナからのお礼状

(諏訪 ひかり)

みなさんこんにちは。N たま 11 期生の諏訪です。

3月15日、N たま研修の修了式を行いました。それに伴い、チエル救でのインターンも終わってしまいました。(; ;)

ポレーシエへの登場も今回が最後になります。

今回は、ウクライナのカウンターパート「ホステージ基金」の代表ドンチェヴァさんと、ナロジチ町「おひさま幼稚園」から、クリスマスカード・キャンペーンにご協力くださった皆さまに届けられたお礼の言葉を、お伝えしたいと思います。

ホステージ基金 よい

慈善基金「チェルノブイリの人質たち」は、チェルノブイリ事故によって被災したすべての人に代わり、クリスマスと新年という素晴らしい祝日に先立ってジトーミル州に届けられたクリスマスカードに、心より感謝申し上げます。すでに 20 年にわたって、日本の方々是我们的の州に人道支援を行ってくださっています。そして私たちは、心のこもったものであるだけに、その支援を本当にありがたいことと思っています。

クリスマスカードと嬉しい贈り物をいただいた人たちは、皆このご配慮のしるしに対し、みなさんに感謝しています。私たちはまた、これが同時に、みなさんの私たちに対する友好の気持ちの表れであることを理解しています。遠い国々の方々、そして大事なことにその子どもたちが、私たちのことを思い、気配りをしてくださっているのです。

皆さんの例にならって、私たちも昨年「友情のクリスマス」というキャンペーンを行いました。それによって、ジトーミルの学校の生徒たちも、皆さんの不幸に無関心でないことが証明され、彼らは、遠い日本の同年代の子どもたちへの心からのサポートの気持ちを、手作りのクリスマスカードに表現しました。私たちは、それらを日本の学校や市民団体に送りました。

ジトーミル州の全ての小さな住民たち、彼らの両親や学校・幼稚園・病院の職員たちに代わって、皆さんに申し上げます。ードウモアリガトウ！

敬意を込めて E.E.ドンチェヴァ



ナロジチ町「おひさま幼稚園」よい

親愛なる日本の友人の皆さん！

園児たち、彼らの両親とナロジチ町「おひさま幼稚園」は、新年に先立ってお届けいただいたクリスマスカードに対し、心より感謝申し上げます。

20 年以上にもわたって皆さんと協力させていただき、皆さんが私たちを支援しサポートしてくださっているのは、私たちにとって本当にうれしいことです！

皆さんがゆるぎないご健康、平和とご多幸、豊かさに恵まれますよう、お祈り申し上げます。

このキャンペーンが、原発事故の被害を受けた方々の心の支えとなり、ウクライナと福島の間で離れた場所で暮らしている人々を繋げるきっかけとなっていることを、強く実感しました。その繋がりは、彼らにとって勇気や励ましとなるとても大切なものであり、それが「友情のクリスマス」という形になったのは、これまでのみなさまのご協力があったからだとすることも、実感することができました。改めて、みなさまに感謝を申し上げるとともに、今年も心温まるカードが事務所に集まることを楽しみにしています。よろしくお祈りします☆

事務局便り

☆ご寄附の報告☆ 総額：7,154,587 円（10月～3月20日）
ご支援くださった皆様、ありがとうございます。

コンバインキャンペーンは、スタートから今までに400万円以上の寄付が集まっています！！

- 福島菜の花プロジェクト…………… 3,731,899 円 ●指定なし(一般寄付他)…… 2,784,288 円
●被災者支援(ウクライナ・福島)…… 638,400 円

☆支援者の声・声・声…☆（字が小さくてごめんなさい。）

壮大な「フクシマ菜の花プロジェクト」を応援しています（兵庫県）。／福島のためにがんばってください。菜の花畑が広がりますように（名古屋市）。／素晴らしい取り組みですね。不屈の努力にこちらが励まされる思いです（盛岡市）。／ナタネの収穫お疲れさまでした。今年はコンバインで刈り取れるといいですね（高浜市）。／膨大な事務に頭が下がるばかりです（盛岡市）。／これからもボレーシエ読みたいです!!（福山市）。／ナタネ油いい感じですよ（春日井市）。／皆の力で実現したいと思います。東近江の菜の花プロジェクトも応援します（滋賀県）。／国会周辺の反原発デモを「テロ」と言いくるめた石破幹事長の発言に、怒り心頭です!（東京都）。／友人がクリスマスカードに協力してくれました。感謝感激です（中津市）。／「継続は力」はチェル救のことを云うのでしょ（名古屋市）。／一人でも多くの子どもたちが安心して暮らし、大きくなりますように（三重県）。／原子力発電所が必要のない社会を目指していきたいです!!（小牧市）。／チェルノブイリでの実績を東北の原発被災地で生かしておられること、応援します。核燃サイクルストップ!!（名古屋市）。／福島の現状やイベントの様子をお伝えくださり、ありがとうございます（名古屋市）。／コンバインの購入をお祈りしています!（中津市）。／政府や地元自治体・東電たちが被災者を切り捨てようとしている。現状では NPO・NGO の支援が重要になってくると思います（高浜市）。／同封チラシが多いのは、課題が多いという事ですね（名古屋市）。／ナタネの収穫を手摘み作業で…ご苦労様です。「2014年4月までにコンバインを手に入れたい」夢が叶いますように…わすかですが協力させていただきます（掛川市）。

コンバインキャンペーン!

継続中!!

(近況は P2参照)

南相馬市「小高だいこんかりんとう」の紹介

南相馬市の小高商業高校「商業研究部」が、地域の活性化を目的に企画・考案しました。平成19年、小高区の特産品である「金房大根」が採れすぎ、廃棄処分されそうになりました。甘くて美味しい金房大根をなんとかかしたいと、商品開発の授業で考案され、以来、先輩から後輩に受け継がれています。「小高だいこんかりんとう」には、大根（25%）とおから（30%）が練り込まれています。さくさくの食感で、大根の風味がほんのり感じられます。プレーンと胡麻の2種類の味があります。現在、小高区は作付制限を受けていますので、福島市や郡山市などからの大根で作っています。一袋 ¥400(カンバ込)です。いかが? (美)



編集後記

☆上前津駅構内の東北アンテナショップ「みちのく屋」に行ってみた。名古屋では珍しいどんこ、鮫や、うに・いくら・牡蠣入りのお寿司がこの価格で!?と、嬉しいお買い物がありました。（佳）
☆追悼集会が行われる久屋公園に行ってみた。2万個の蝋燭に火を灯して2時46分を待つ。黙禱に参加するため、静かに肅々と人が集まって…名古屋の祈りが東北まで届きますように。合掌。（美）
☆右傾化へと暴走する日本、クーデターに翻弄されるウクライナ。私達チェル救の大切な国が、重大な局面を迎えている。ウクライナの政変は、世界支配を目論む金融マフィアの傭兵（ネオ・ナチ）によるものであった。日本の背後で圧力をかけているのも、同じ人間達である。東南アジア・アフリカ・南米・中東へと、世界の隅々に軍隊を送り込み、殺戮を繰り返してきた張本人もまた、彼等である。日本・ウクライナの一般市民が、隣人の声に耳を傾けこの真実に気づくならば、世界平和は目の前にある。地球儀を見ればわかるように、日本は東隣・ウクライナは西隣と、どちらもロシアの隣国である。いずれにせよ、金融マフィア崩壊のカウントダウンは、既に始まっている。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473